グランプリで見た歴史的な優勝と王道の優勝

伝説の航跡 百物語

文　鍋島ヒロシ

アメリカに女性大統領は生まれなかった。様々な要因があるとはいえガラスの天井は厚かった。鵜飼菜穂子さんがこの言葉を口にしたのを思い出す。引退の際に自分の選手人生を振り返ると、そこには厳然とした強豪男子の壁が立ち塞がっていたからだ。

その後、遠藤エミのクラシック制覇があった。ガラスの天井に風穴を開ける快挙だったが、冒頭の一文になぞらえるには、賞金女王を飛び越えて賞金王に輝く必要があるか。男女のツアーが独立しているプロゴルフでは、もう何年も男女の獲得賞金が逆転している。今年は女子の賞金トップが、男子の倍以上を稼いでいる。日本ならではの現象かもしれないが、女子選手人気はボートレースも同様だ。

もっともボートレースは、いわば同じ土俵で戦うし、その中の選手数が男女で大きな開きがある。男女比的には政治の世界に近いのでは…なんて再び冒頭の一文に近づくが、遠藤エミはあの年、選出13位でグランプリのトライアルに行った。女子レーサーが賞金トップになる確率はゼロではない。スポーツの歴史は未踏の記録を塗り潰してきた歴史でもある。その代表的なものがボートレースグランプリにあった。

初出場者は優勝できない。

１９８６年に始まったグランプリ、賞金王決定戦には、20年以上

伝説の航跡 百物語

このジンクスが横たわっていた。2回大会から初出場者は［6名・8名・4名・3名・4名・4名・2名・4名・4名・1名・4名・4名・0名・3名・4名・4名・1名・2名・5名］と推移し、延べ22選手がファイナルに名前を連ねたが、18回大会と21回大会の準優勝が最高だった。付け加えると－全員が初出場の－1回大会の覇者が、艇王と呼ばれた彦坂郁雄。さすが最高タイトルというべきか、新参者の快走を許してはくれなかった。

そこで迎えた2007年、22回目の賞金王決定戦競走は、常打ち競走場である住之江を離れての開催。平和島（6回・15回）、戸田（11回）に次いで福岡で行われた。住之江なら独特のオーラを放つ大阪支部勢も、ここではそういうわけにはいかない。実際、過去21回中9回の優勝は、すべて地元でのものだった。いつもと違う水面が、初出場者に活路を開いた側面は確かにあっただろう。

【第22回賞金王決定戦競走出場者】

松井　繁（5位）2年連続12回目
服部　幸男（11位）10年ぶり4回目
高橋　勲（7位）初出場
三嶌　誠司（12位）2年連続2回目
田中信一郎（8位）3年ぶり6回目
濱野谷憲吾（4位）6年連続9回目
魚谷　智之（1位）2年連続2回目
瓜生　正義（3位）3年連続4回目
吉川　元浩（6位）初出場
寺田　祥（10位）初出場
井口　佳典（9位）初出場
湯川　浩司（2位）初出場

魚谷が最も弾けていた時期である。前年の当地ダービーでSG初制覇を果たせば、この年はオーシャン、モーターボート記念と夏のSG競走を連覇して、選出1位で2度目の出場を決めた。2位の湯川は初出場だったが、こちらもグラチャン、チャレンジとSGV2。3位の瓜生、4位の濱野谷（総理大臣杯）、7位の高橋（ダービー）までが、この年にSGタイトルを取った面々だった。

あの6コース勝ちから10年、服部の出場が注目を集めた。そして三嶌が熾烈なボーダーラインの攻防を制して、12番目の椅子に滑り込んだ。原田幸哉との16万7500円という、僅差の争いに競り勝った。

当時は11月末日が選考最終日。月またぎの尼崎モーターボート大賞を走った三嶌は、序盤2日間を211着で切り上げた。3走目のイン逃げを振り返っての勝利者インタビューが、涙声になったのを覚えている。予選の1勝なのに何故？　賞金王へ必勝のレースだったからだ。チャレンジカップで終わる、今の方がずっとスッキリしているが、当時は当時でドラマチックだったのだ。

吉川は初出場5選手の一人だった。前年までにGI優勝3回とSG優出6回を数え、前年の当地ダービーでは魚谷と同支部ワンツー。この年は活躍に拍車をかけて、SG優出は1度に留まったものの、11月までに優勝6回（GIV2・GⅡV1）を記録し、初めて遂に賞金ボーダーを乗り越えてきた。

そして臨んだ最高の舞台。吉川は前検から抜群の動きを見せつけた。タッグを組む32号機は、2連対率37％とグランプリレベルでは平凡ながら、前操者のA2級選手が得点トップから優勝戦完勝。近況の良さはお墨付きだった。ついでに書けば、その前が新人選手のデビュー戦で、着順は失6355455。ありがちな成績だが、その新人選手とは篠崎仁志。なら少しホホーッとなるか。

◎トライアル初日

【11R】湯川浩司（逃げ）→吉川元浩
【12R】井口佳典（まくり差し）→魚谷智之

◎トライアル2日目

【11R】吉川元浩（逃げ）→田中信一郎
【12R】湯川浩司（逃げ）→井口佳典

湯川が連勝、吉川と井口が1着と2着で、トライアル最終日を待たずして、彼らのファイナル進出が確定的になった。湯川はチャレンジカップ優勝時に、浜名湖のステージでアントニオ猪木さんから、闘魂注入のビンタを貰った効果もあったのか、連続1号艇で逃げを連発させた。そのままの勢いで、トライアル3戦目も1号艇を引き当てる…。

同期の井口も負けず劣らず、というか初戦5枠6コース、2戦目3枠4コースを考慮すれば、最も中身の濃い内容でここまで来た。この時点ではまだSGタイトルに恵まれていなかったが、既に2つのGIタイトルと2度のSG優勝戦を経験し、その内の大半がこの年のものだった。85期で田村隆信と双璧と言われた逸材が、遅ればせながらスポットライトを浴びようとしていた（一方の湯川は「エンジンが出る」と教官評。さすが慧眼）。

◎トライアル3日目

【11R】井口は勝負の3戦目も非凡だった。枠なり進入の3コースから、内の田中を叩いてイン瓜生を捕えるまくり差し。2着には優出圏外の服部が続いた。井口はこれでトライアルの得点を29点まで跳ね上げた。普通なら決定戦1号艇に適うもの。しかし次のレースには、連勝の湯川が絶好枠に組まれていた。もうひとり吉川も虎視眈々と狙っていた。

【12R】

①湯川　浩司11（20点）
②三嶌　誠司43（13点）
③濱野谷憲吾55（10点）
④寺田　祥45（11点）
⑤吉川　元浩21（19点）
⑥松井　繁33（14点）

吉川の運命を決めた一戦である。ここでは湯川と吉川がポールポジションを懸けての戦い。松井と三嶌はファイナル進出の可能性

を残していた。インには湯川が枠なりに入った。逆に吉川は松井にコースを譲って6コース発進、覚悟を決めてスタートに集中した。進入は①②③④⑥⑤の3対3の隊形になった。

インからコンマ04－15－13－16－13－07という、中へコミのスリット隊形になったことが、吉川のチャンスを広げた。大外からグングン伸ばして、1マーク手前で湯川を視界に捕えた。思い切りブン回して突き抜けた。思い描いていた戦略がモノの見事にハマった瞬間だった。

吉川は同得点になった場合のタイム差を意識していた。自分が2走目に計時した1分46秒4が、直前のトライアル5戦を終えての最速だった。勝てば湯川が2着でも、井口と同点でもタイム差が生きてくる。結果、湯川は圏外の寺田に粘られて3着までだった。吉川が井口をタイム差で抑えて明日の1号艇を取った。

【賞金王決定戦／2007福岡】
①吉川元浩(35歳・兵庫)211
②井口佳典(30歳・三重)121
③湯川浩司(28歳・大阪)113
④魚谷智之(32歳・兵庫)243
⑤松井　繁(38歳・大阪)335
⑥三嶌誠司(39歳・香川)434

初出場3選手で内枠を固めたが、形勢は吉川に傾いていた。まず進入が枠なり3対3にスンナリ決まった。イン逃げを図る吉川の横で、やや立ち遅れた井口が湯川に突っ込む形になった。湯川は大きく弾かれ、井口は無理マイが祟ってエンストした。ダッシュ勢の差しはこれを一瞬見た分遅れ、ここで大勢は決した。

吉川は2マークを先行した時点で、事故艇もあるからと優勝を確信した。後方では松井が魚谷を押さえ込んで、常連組のせめてもの意地を見せたが、初出場者初の賞金王制覇は、誰の目にも明らかだった。

「福岡の賞金王は、全員が初出場だと思って走りました」

初出場者にまつわるジンクスについて問われ、吉川はこんな風に答えている。メジャーリーグのポストシーズンで、ドジャースがあと一敗に追い込まれた時「2連勝すればいい」と言ったあの人と、似た発想の言葉ではないか…。

それまでにも得点トップの初出場者は、10回大会の松井繁、12回大会の太田和美、13回大会の江口晃生といたが、枠番が最後まで抽選だった。インもあったし1号艇もあったが、その選手は成績が物足りず、仕上がりも見劣っていた。そもそも枠番とインが絶対的ではなかった。時代の変遷と福岡をキーワードに、吉川がジンクスを破ったのだと思う。

もっともその後2回の初出場者による優勝は、インの立ち遅れに恵まれた2コース勝ち（中島孝平）と、平和島での6コース勝ち（茅原悠紀）。いわゆる王道を走ったわけではない。前年はまさしくそうだった。

【第21回賞金王決定戦競走出場者】
川崎　智幸(11位)10年ぶり2回目
上瀧　和則(9位)3年連続8回目
松井　繁(2位)2年ぶり11回目
三嶌　誠司(8位)初出場
濱野谷憲吾(6位)5年連続8回目
山崎　智也(1位)4年連続9回目
辻　栄蔵(7位)4年連続4回目
魚谷　智之(5位)初出場
瓜生　正義(12位)2年連続3回目
中澤　和志(10位)初出場
坪井　康晴(4位)初出場
中村　有裕(3位)初出場

このラインナップに目をやれば、松井のところに「2年ぶり11回目」の記述。前年のオーシャン準優でFを切り、賞金王の連続出場が10年で途切れていた。つまりリベンジの年、それは当年のオーシャン優勝で、ひとまずは果たしたものの、誰よりも賞金王にこだわってきた選手である。リベンジの舞台はここにあった。

松井は前検から絶好の気配を示した。しかも初戦の1号艇は約束されていた。彼が初出場時に、得点トップで優出したことは既に書いたが、この時の枠番は3→2→3枠と来て、決定戦が4号艇だった。99年まで全4戦で枠番抽選していた時に、5回出場して20回ガラガラを回したが、白玉が出てきたことは一度もなく、青＋黄＋緑が13回あった。優勝した99年の大会でも、枠番の流れは4→2→6→2号艇だった。

松井は「引き」の弱さで知られていた。00年に決定戦の枠番が得点順になり、04年からは初日の枠番も選出順になった。何よりもの僥倖だった。00年以降は14回抽選に臨んで1号艇を4回引き当てた（6号艇にも5回当たったが）。抽選運も少し上向かせてトライアルに臨んだ。

◎トライアル初日
【11R】魚谷智之(まくり差し)→山崎智也
【12R】松井　繁(逃げ)→中村有裕

◎トライアル2日目
【11R】辻　栄蔵(まくり)→坪井康晴
【12R】瓜生正義(逃げ)→魚谷智之

2日目を終えた段階で、初出場の魚谷が一歩リードした。この年のダービーを獲ったターンがここでも冴えた。松井は初戦のイン戦をしっかりモノにした。落としてはいけない1号艇のレースだった。だが、2戦目は一転6号艇。引きの弱さを垣間見せたが、こんなパターンには慣れていた。大外発進から好位に取り付いて、2マークで3着を決めた。同時に超抜を確信した。魚谷ともどもこの段階でファイナル進出を決めた。

◎トライアル3日目
【11R】山崎智也(逃げ)→中村有裕
【12R】松井　繁(逃げ)→瓜生正義

前日の枠番抽選。松井は見事に白玉を出した。これまでにはない引きだった。11Rで魚谷が4着に

伝説の航跡

敗れていた。明日に向かって逃げるだけの12R、松井は誰も寄せ付けなかった。トライアル全6戦が終わってみればイン4勝。住之江らしい傾向になっていた。

【賞金王決定戦／2006住之江】
①松井　繁（37歳・大阪）131
②魚谷智之（31歳・兵庫）124
③山崎智也（32歳・群馬）241
④瓜生正義（30歳・福岡）512
⑤中村有裕（27歳・滋賀）262
⑥坪井康晴（29歳・静岡）623

日付は12月24日。クリスマスの時季の風物詩と言えば、ボートレースが賞金王決定戦なら競馬は有馬記念。ともに「グランプリ」と称され、例年それぞれの業界で最高の売上を記録する競走だ。この年は揃って同日のイブ決戦となった。

有馬の主役はディープインパクトだった。中山競馬場の直線を翔ぶように駆け抜けて、ラストランを見事に飾った。その数十分後のボートレース住之江で、決定戦はピットアウトした。松井の出番が来た。

松井はしっかり睨みを利かせて、ゆっくりとインに入った。枠なりの3対3、コース取りに動きはなかった。スタートして一瞬、中村が艇をノゾかせたが、これを瓜生が受け止めた。この勢いで山崎、魚谷を飲み込んで松井に迫ったが、松井はまったく動じなかった。グイっと撥ね付けスーッと回った。そのアシがエグかった。スタートから1マークの運び…完璧なイン逃げだった。

その後の2着争いは、大外から差した坪井が2マークで瓜生を捕えた。初出場の選手が2着に健闘したのは2度目のことで、奇しくも競り落とした瓜生は、初めてこれを記録した選手だった。彼らの前方を独走した松井は、2度目の賞金王制覇を決める歓喜のゴールを切った。

「ディープインパクトに負けない、素晴らしいアシでした」

松井はメディアに嬉しい、見出し仕様のキャッチーなコメントをくれた。達成感と喜びに溢れていた。自らの手で最高のクリスマスプレゼントを、自らに与えたのである。賞金王の歴史の中でも、イブの日に賞金王決定戦と有馬記念が行われたのは、95年・00年・06年・17年・23年の5回しかない（しかも06年を含む近3回の勝利騎手は武豊だ）。特別な日の格別な優勝劇だった。

松井はここから12年連続でグランプリの舞台に立ち、3年後の24回大会で優勝回数を一つ増やした。95年から10年間では8優出1優勝。空白の1年を挟んだ12年間では7優出2優勝だ。これに20年の出場と優出があり、今年に24回目の出場機会を得る。

松井繁というボートレーサーこそが、ミスター賞金王だ。ミスターグランプリでもいいのだが、マッチョ系男性のコンテストを連想させるし（私見です）、グランプリの優勝がない年にも、2度の獲得賞金1位がある。

また、グランプリ実績を見ても、優勝3回は、野中和夫、植木通彦、田中信一郎と並ぶトップタイだが、これまでの出場回数23と優出回数16は、ともに2番目の瓜生正義（16出場－9優出、優勝は2回）を大きく引き離す断然の数字だ。もちろん出走回数（94）も1着数（22）も、他の追随を許さない。

今回は賞金王決定戦競走→グランプリにおける、レアな初出場者の跳躍と王道の優勝劇を書いたが、そこに少なからず影響を与えていたのは、住之江というレース場の存在だった。別表に記したSGタイトルの内、クラシックとメモリアルとダービーが開催回数と違うのは、クラシック、メモリアルの中止1回、67年ダービーの優勝戦不成立を引いて、メモリアルの初期に4回、ランナとのダブル優勝が行われたから。ここにあるのは成立したSG優勝戦の回数だ。

最近ではダービーが埼玉ワンツーで盛り上がったが、そこにある地元優勝の確率は、グランプリが断然で、大阪支部勢には住之江以外の優勝はないので、7大会を差し引くと確率は更に跳ね上がる。これをSG全タイトルに広げると、住之江で大阪支部勢は96回中24回で優勝している。全部のSG優勝戦数が426で、全部の地元優勝が67である。24場の中での住之江の立ち位置が分かるし、大阪から出た数々のスーパースターを思い浮かべると、その強さが納得できるというものだ。

ただ、今年のグランプリに限ると、昨年覇者にして過去V2の石野貴之がいない。ランキング上位の壁は厚いが、松井繁の奮闘が望まれる。最も登録番号の古い出場者は、未だに優勝したことがない。

逆に新しい者にも優勝がないのだが、これに該当する定松勇樹は、服部幸男、上瀧和則に次ぐ史上3番目の若さで出場する（同支部の大先輩とは誕生日が15日違うだけ）。23歳で優勝すれば、「最年少のグランプリ制覇」がニュースになるだろう。

また、大阪とは対照的にグランプリ優勝がない支部がある。滋賀と長崎がこれに当たるが、滋賀には今回、馬場貴也という優勝候補がいる。彼がどこまで行くのかも、注目すべき事柄だと思っている。

SG優勝戦 タイトル別 地元V

タイトル	地元優勝実績	
クラシック	5/58	8.6%
オールスター	9/51	17.6%
GC	3/34	8.8%
OC	6/29	20.7%
メモリアル	14/73	19.2%
ダービー	10/70	14.3%
CC	4/26	15.4%
グランプリ	12/38	31.6%
GPS	3/27	11.1%
復興競走	0/1	0.0%
全国地区対抗	1/19	5.3%
計	67/426	15.7%

※2024年ダービーまで